

思考型漁業体験で切り拓く水産業の未来

— 私たちの新たな挑戦 —

内浦漁業協同組合青壮年部

日吉 勝也

1. 地域の概要

内浦地区は静岡県東部の沼津市に属し、駿河湾を臨む伊豆半島の付け根に位置している（図1）。日本一深い駿河湾に面し、多様な海岸線を有することから、古来より漁村として栄えてきた。また、首都圏から車で2時間程度という好立地を活かし、観光地としても発展している。



図1 内浦地区 位置図

2. 漁業の概要

内浦漁業協同組合では、イワシ、サバ等を対象にした中型まき網漁業や、マダイ、マアジ等の養殖業が盛んである。特にマアジの養殖量は全国1位であり、これを提供する漁協直営食堂は大変な人気店となっている。令和6年の水揚量は5,770トン、水揚金額は23億3,325万円であり、水揚金額のうち、まき網漁業が18.3%、養殖業が80.3%を占めている（図2）。

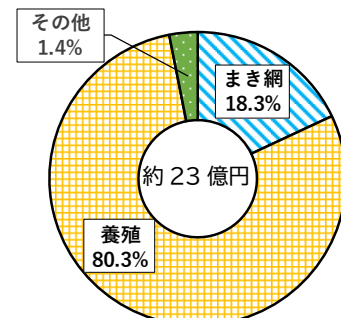


図2 令和6年の水揚金額

3. 研究グループの組織と運営

内浦漁業協同組合青壮年部は組合所属の50歳未満の組合員21名で構成され、昭和35年の結成以来、マダイやヒラメの栽培漁業や水産教室等に積極的に取り組んできた。

4. 研究・実践活動の取組課題選定の動機

部員の多くはまき網漁業や養殖業の従事者であるが、近年は、不漁や飼料の高騰等に苦しめられている。所得も不安定になり、それに伴い漁協組合員は減少している。青壮年部も例外ではなく、平成15年には55名いた仲間が、わずか10年後には27名まで減少した。

「所得の減少」と「漁師の減少」、この二つの課題に直面した私たちは、「このままでは、自分たちが育ってきた海から漁業が消えてしまうのではないか」という危機感を抱くようになった。

そんな折、旅行代理店から、東京の中学校の漁業体験を有償で受け入れてもらえないかとの打診があった。これまで私たちが行ってきた水産教室は、地域の子供たちに漁業への親しみをもってもらうために行っていたため、無償であった。これが県外の中学生への有償の漁業体験となれば、水産教室と同じ内容とはいかず、果たして、私たちに対価を得るに値する体験を提供できるのか、不安であった。しかし、漁業体験であれば、これまでに培った水産教室の経験も活かせる上、漁業者の収益増加が期待できると考え、これを受け入れることにした。

5. 研究・実践活動の状況及び成果

(1) 初年度の受け入れ

初年度は、平成 29 年 8 月に中学 1・2 年生の生徒 36 名を 2 泊 3 日の日程で受け入れることになった。学校側は、私たちの漁業体験とは別に農業体験等のプランも用意しており、内浦には漁業体験を希望した生徒が来るということであった。

1 日目は、漁協業務や漁業の概要を説明し、漁協施設等の見学を行った。2 日目はいよいよ漁業体験で、カゴ漁体験と養殖業体験を行った(図 3)。カゴ漁体験では、班ごとにゲーム感覚で漁獲成績を競わせることとし、養殖業体験では、漁業者が養殖業について説明した後、給餌体験を実施した。1 年目は不安の中でのスタートであったが、船に乗るだけで楽しそうな子供たちの様子を見て、私たちの不安も吹き飛び、ただ単に体験を提供するだけではなく、この子供たちの良い思い出となってくれたらと親近感が芽生えた。3 日目は魚市場を見学し、昼食では、

漁協直営食堂で、前日に給餌体験した養殖魚のおいしさを体感してもらった。生徒からは、「海鮮はあまり好きじゃなかったけど活あじ井がおいしすぎた。」「アジフライもおいしすぎ



カゴ漁体験



養殖業体験

図3 初年度の体験内容

た。」などの感想が寄せられ、早くも体験の効果を感じることができた。

本体験によって約 31 万円の収入が得られ、支出を差し引いた約 18 万円が手元に残った。1 人当たりになれば大した金額ではなかったが、自分たちが考案したプログラムがしっかりお金になり、漁業体験に可能性を感じた瞬間であった。

(2) 規模の拡大と思考型漁業体験への進化

初年度の評価が良かったことから、2 年目以降も継続して実施することが決まった。2 年目、3 年目は、ロープワーク体験や、漁師との談話、釣り教室の追加等といった内容の改良を行いながら体験を受け入れていたが、新型コロナウイルスの流行により、続く 2 年

間の漁業体験は中止になった。

そして、いざ迎えた4年目（令和4年）に、学校側から、これまで農業体験等に分散していた4クラス100人規模の生徒全員を受け入れてもらえないかとの予想だにしていなかった打診があった。ありがたい申し出ではあったが、100人規模となると、これまでの30人規模とはわけが違い、従来の体制での受け入れは簡単ではなかった。そこで、体験内容を精査し、複数の体験をクラス毎に時間差で受けってもらうローテーション方式を採用した。例えば、1、2組が釣り体験を行う裏で、3、4組がカゴ漁体験を行うなどし、これによって効率的に体験プログラムが進行できるようになった（図4）。また、人員不足を補うために、組合所属の遊漁船業者や地域の釣具メーカーの協力も得られるように奔走した結果、なんとか100人規模の体験漁業を受け入れる目処が立ち、私たちはこの依頼にチャレンジすることとした。

私たちには「私たちの漁業体験を唯一無二のものにしたい」という思いがあった。そこで、学校側に相談すると、学校側から、五感で体験することはもちろん、「PBL（Project Based Learning）、【問題解決型学習】を意識させてみてはどうか？」という提案を受けた。PBLについて調べると、知識の暗記ではなく、生徒自身が課題を発見し、解決策を模索する能動的な学習方法であった。私たちは、普段「漁」をする上で実践している【情報】から【予測】し、【目標】を立て、結果を【分析】するといった行動が学校側からの提案に類似していることに気がついた。そこで、私たちは、漁業体験に【教育】を融合させた唯一無二の漁業体験を生み出すべく、カゴ漁体験に、教育の要素を取り入れた「思考型漁業体験」を新たに誕生させることにした。

| 組 | 1日目 | 2日目 | | 3日目 | |
|---|-----------|-------|-------|------|-----------------|
| | | AM | PM | | |
| 1 | オリエンテーション | 釣り体験 | 養殖業体験 | 施設見学 | 漁協食堂での昼食 発表会 |
| 2 | | | かご漁体験 | | |
| 3 | | 養殖業体験 | 施設見学 | 釣り体験 | |
| 4 | | かご漁体験 | | | |
| | | 施設見学 | 養殖業体験 | | |

図4 規模拡大後の体験プラン

（3）思考型漁業体験の実施

こうして4年目以降は、釣り教室、養殖業体験、施設見学に加え、思考型漁業体験を実施した。

思考型漁業体験では、1日目のオリエンテーションの際に、生徒たちがグループワークで班ごとにカゴの設置場所を決め、さらに狙いの魚種や量、水揚金額等の目標を立てる。その際には、参考情報として、カゴを仕掛ける海域の海底地形図と、毎年度、過去の漁業

体験での設置した場所と漁獲物のデータを提供している。また、生徒たちは個人単位でタブレット端末を所持しており、インターネットで当日の天候、カゴ漁の特性、魚の習性、魚価等の情報を調べさせることで、IT技術を利用した学習機会を提供できるようにしている。さらに、その場に青壮年部員も同席し、漁師に相談を行うこともできるようにしている。その際には、良い場所などの直接的ヒントは与えず、計画への助言などにとどめるようにし、あくまで生徒たちの考えを尊重するようにしている。初めてカゴ漁をする生徒たちには固定概念がないため、時には、カゴを中層に設置してイワシを狙おうといった意見が飛び出すこともあり、子供たちの柔軟な発想に私たちも驚かされている。また、このグループワークを行う際のルールとして、【班内で自分の意見を述べる】、【相手の話に耳を傾ける】といった条件を付与することで、生徒全員に情報を整理し考え、議論する機会を提供している。

2日目には、私たち青壮年部員が、前日に各々の班が決めた場所にカゴを設置し、2時間後に引き上げて陸上で待つ生徒たちのもとに漁獲物を持ち帰る。場所ごとに捕れる獲物が異なり、生徒たちは結果に一喜一憂している。令和7年の体験では、フグしかとれずに落ち込む班もあれば、2kg近いタコが入った班では、まるで事件でも起きたのかと思うほどの騒ぎ様であった。なお、漁獲物は翌日に漁協の市場でセリにかけ、金額を生徒たちに示している。

最終日である3日目には、発表会の時間を設け、班ごとに事前に調べた情報、その上で立てた仮説と目標、それに対する結果を踏まえ、良かった点、改善点等を発表させている。また、この発表に対し、青壮年部員がプロの目線から講評を行う。これらにより、生徒たちが自然相手という漁業の難しさをよりリアルなものとして感じる機会を創出でき、単なる漁業体験と比べて、水産業への理解が深まるものになっていると考えている。



①グループワークの様子



②海底地形図



③漁獲されたタコ



④発表会の様子

図5 思考型漁業体験の内容

(4) 生徒・学校からの評価

令和7年に実施したアンケート調査では、思考型漁業体験に対する生徒たちの評価は好

意的評価（やや満足、満足）が8割近くを占め、体験全体に対しては実に100%が好意的評価であった（図6, 7）。

また、「カゴ漁について、もっと話し合っていたらより良い結果になっていたかもしれないと思うと悔しくなった」、「魚の状態やサイズが小さいと売れないという現実の厳しさを知ることができた」といった本取り組みならではの感想も寄せられている（図8）。

先生方からは、「問題解決型の学習に積極的に取り組めるプログラムが良い」、「漁師や漁協で働く人々に直接話を聞く時間が設けられている点が良い」、「生徒同士、学校では見せない意外な一面を見る機会になっている」といった評価を受けている。

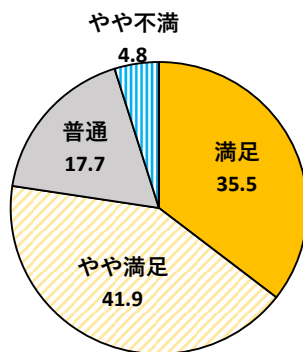


図6 カゴ漁体験の評価

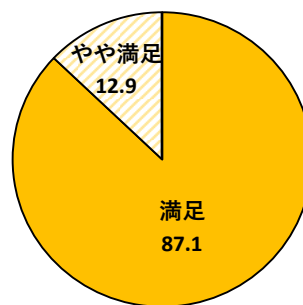


図7 全体評価

- ・カゴ漁について、もっと話し合っていたらもう少し良い結果になっていたかもしれないと思うと悔しくなった
- ・魚の状態やサイズが小さいと売れないという現実の厳しさを知ることができた

図8 生徒たちの意見

(5) 受け入れ人数・収益状況の推移

受け入れ人数はコロナ禍による休止を挟んだ4年目から大幅に増加し、近年は100人を超えている（図9）。受け入れ人数の増加に伴い、収益も増加傾向であり、令和7年には初年度の約3倍の70万円近い収益を上げることができた（図10）。得られた収益は青壮年部の活動費用としているため、個人には分配していないが、仮にこの金額を活動に参加した部員数と時間で割ると時給換算で約3,254円となり、調べてみると職業安定業務統計における令和元年度の求人賃金を基準とした一般基本給・賞与等の額を時給換算した漁業者の時給額が1,253円なので、比較しても非常に高い所得となっていることが分かった。

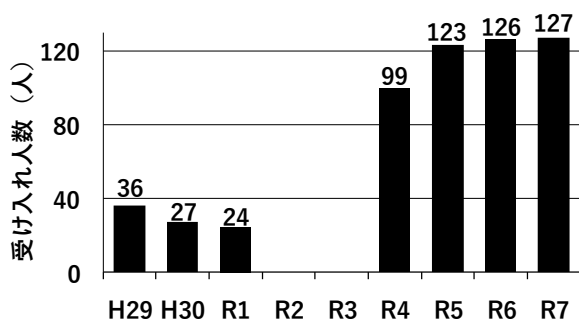


図9 受け入れ人数の推移

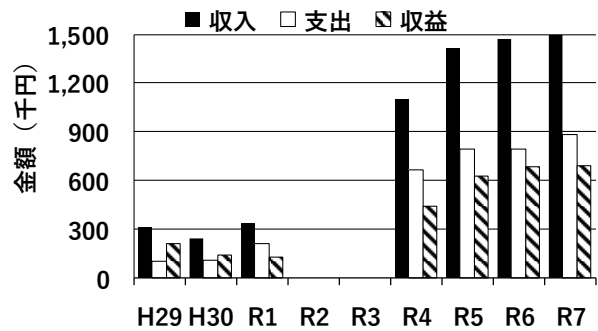


図10 収益の推移

6. 波及効果

現在、漁業体験等を事業とする民間企業が本取り組みに興味を持ち、学校相手の漁業体験とは別に、個人の漁業者が家族単位や個人単位で体験を受け入れる方向で検討を進めている。さらに、水産庁の海業に取り組む地区にもエントリーし、漁業体験の拡大に向けた話も加速している。

また、令和7年に生徒たちに実施したアンケート調査によれば、漁師の仕事に興味を持った、海を大事にしたいとなった、もっと魚を食べたくなったという水産業の未来につながる効果が得られている（図11, 12, 13）。

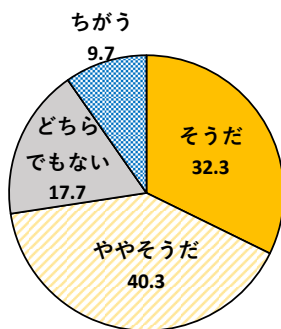


図11 漁師の仕事に興味があった

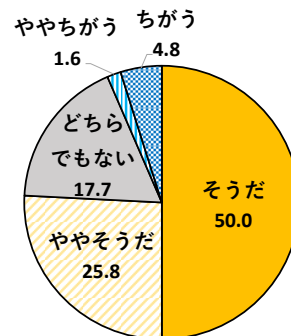


図12 前より魚を食べたいと思うようになった

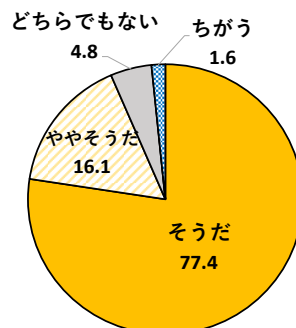


図13 海を大事にしたいと思うようになった

7. 今後の課題や計画と問題点

今後、収益を増やすために受け入れる学校を増やすことも考えられるが、本取り組みの経験から、本業の漁業に負担のない範囲では、これ以上回数を増やすことは難しいのではないかと私たちは考えている。そこで、今後は個々の部員がそれぞれのスタンスにあった漁業体験を模索し、個人や家族を対象にした小規模な漁業体験を提供することで、収益の底上げを行う計画である。その際には、漁業に興味を持つ人の受け入れ等を行うことで、仲間の確保にもつなげていく。

一方で、この取り組みからは水産業の未来につながる効果が得られていることから、今後も要望のある限り継続していく。また、私たちは現在の内容が完成形だとは考えていない。例えば、カゴ漁体験においてカゴの沈設・回収の瞬間を陸で待つ生徒たちにリアルタイムで配信する、思考型漁業体験の漁法を増加させるなどの改良を予定している。また、学校側からは生徒たちを漁に同乗させたいという要望もあるため、それに応えられるよう検討を重ねているが、備船の手配や安全上の問題もあるため、まだまだ検討が必要である。

また、本体験は、当初は収益化を目的に始めた取り組みだったが、思考型に進化する過程で水産業への啓発効果が高まり、今では地元の子供たちにこそ受けてもらいたい内容だと感じている。そこで、今後は地元向けの水産教室に思考型の要素を取り入れ、より地域の水産業に親しみを持ってもらい、願わくは未来の漁師を育てていきたい。

私たちは、従来の漁業のみで当地区水産業の維持・発展を図ることは困難であると考えている。それでも漁師であることに誇りをもち、今後も漁師を続けていきたいと願っている。これからも私たちが大好きな海と共に生きていくために、「海業」に「教育」を取り込んだ思考型漁業体験が、水産業の未来を切り拓く鍵であると信じ、私たちはこれからも挑戦を続けていく。